特集 雪・氷の本

本棚ぶらり

暗い、寒い、と
どこかネガティブなイメージの冬。
ですが、詩人の高村光太郎は
「冬の送別」(＊) という詩のなかで

冬の美こそ骨格の美、
冬の智慧こそ聖者の智慧、
冬の愛こそ魂の愛。

と詠い、春の訪れを嘆きました。
そう、冬とは魅力的な季節なのです。
そんな冬を象徴する
雪や氷についての本を
集めてみました。

＊「日本の詩歌10　高村光太郎」
(中央公論社　1965) 所収

北越雪譜
鈴木牧之編撰　岩波書店　1978

雪国の生活を描いた本といえば、まず思い浮かぶのが鈴木牧之の著した『北越雪譜』。

1837年（天保8年）から1841年（天保12年）に出版された2編7巻には、雪に関する科学的な説明から始まり、雪国と暖国の違い、地場産業の縮や越後各地の案内などが詳細に描かれています。なかには、「初雪から12月25日までの間の積雪が18丈（約54メートル）あった」「熊に助けられた老夫」など驚くような話もあります。また、数多くの挿絵により当時の雪国の様子をよりいっそう伺い知ることができます。しかし、残念なことに1842年牧之の死により、雪国の暮らしを描いた2編は正月の様子から春・夏へと移るところで終わってしまいました。

昨今の地球温暖化や消雪技術の進歩などで、雪国の生活は昔とは大きく変化していると思われますが、寒い冬、雪国へタイムスリップしてみませんか。

雪の結晶 小さな神秘の世界
ケン・リブレクト著、矢野真千子訳
河出書房新社　2008

雪の世界へようこそ。

二千年以上も前の中国の本には、すでに雪の結晶が六角形だと書かれている。17世紀には天文学者のケプラーが、雪の結晶は六角形をしている事を指摘し、なぜ六角形になるかをはじめて論じた。

日本においては、江戸時代に土井利位（どいとしつら）という殿様が顕微鏡をつかってスケッチした『雪華図説（せっかずせつ）』という本をのこしている。

雪の結晶。自然が作り出す造形美は、私たちがふだん思っているよりずっと奥深いものである。この本は写真を250点以上掲載。典型的な形から珍しい形まで、構造や種類、結晶の成長、しくみなどを解説。ルーペ・顕微鏡・カメラを使った観察方法も収録されている。

この本を手にしたら、雪の降る日がきっと待ち遠しくなるでしょう。

マイナス50℃の世界
米原万里／著、山本皓一／写真　清流出版　2007

200年も前に極寒のシベリアに漂着した日本人達がいた。天明2年（1782年）、商人の大黒屋光太夫の船は激しい嵐で太平洋を漂流し、たどり着いたのはアリューシャン列島のアムチトカ島。その後、ロシアの大地を10年間漂泊しながら生きのびた。その冒険は井上靖の「おろしや国酔夢譚」などの小説にも描かれた。

著者は、彼らの足跡をたどる番組の取材班に同行した。シベリア横断のルートの中で、特に寒さの厳しいヤクート共和国（現サハ共和国）の気温は、真冬にはマイナス50℃を下回る。その寒極と呼ばれる寒さはどれほどのものなのか。

氷の上を歩くとき、私たちは滑らないよう足元に気をつける。滑るのは、氷そのものではなく、摩擦で解けた氷が水となって膜を作るから。マイナス50℃の世界では、摩擦くらいで簡単に氷は解けない。スキーもスケートも、暖かくなった春先のスポーツだ。この本を読むと、日本の冬はなんと暖かい、と感じるに違いない。

雪の下の蟹
古井由吉著「男たちの円居」（講談社、1970）所収

いつ降りやむのかわからない雪。その中で人々は、屋根から雪をおろし続ける。

年始の東京から勤め先の金沢へもどって来た「私」も、はじめは炬燵で本を読みながら遠くに雪おろしの掛け声をきくばかりだったが、やがて下宿の主人の雪おろしを手伝うようになる。雪に閉ざされたなかで「私」は、11月に見た日本海を思い出し、そして海底でひそんでいるはずの蟹を思い浮べる。暗い海の底で、甲羅の中で成長してゆく蟹…その姿が生と死のイメージとして「私」につきまとう。不通になる北陸線、ドブ川に雪を捨てる捨てないでもめる住民、汲み取りにこないためにあふれそうになる便所、そしてようやく雪がやんだとき、そこに現れる破壊された街の姿…。

1963年に北陸を襲った三八豪雪での体験をもとに、生と死と幻想の世界を描いた、古井由吉初期の作品。

としょかん探偵事務所

Q. 雪は融けると水になるけれど、水を凍らせても雪にならないのはなぜ？

A. 雪や氷はあたためると融けて水になります。でも、水をつめたく冷やすと氷にはなりますが雪の結晶はできません。

雪のできかたについて、「水が氷の結晶となったもので…空高く存在している水が凍るのであるが、この空中の水というのは水蒸気のことである…温い水蒸気が自然対流で上層へ昇って行き、かつ風によって異る地点に運ばれて行って、気温の十分に低いところで昇華作用によって固化した場合に雪が出来る」（「雪」中谷宇吉郎著　岩波文庫）

また、「液体の水を凍らせても雪結晶はできません。水蒸気が空中で昇華凝結、つまり液体の状態を解さないでいっきに凍って固体になる時、雪結晶は形成されます」（「スノーフレーク」ケネス・リブレクト著　山と渓谷社）

では雨と雪はどちらが先かと考えると、「雪が雨のおおもとだったわけである」（「雪花譜」高橋喜平他著　講談社）ただ、雨が凍ることもあるようです。「降っている雨が空中で凍ることもありますが、このような種類の降水は凍雨（とうう）と呼ばれます。凍雨の粒子はどのようになっているかというと、凍った水の小さな粒です。雪結晶のようにきらびやかな模様や対称性はどこにもありません」（「スノーフレーク」）